

序

扁桃は、扁桃腺といわれた腺系の概念から病態のほうは陰窩系にうつり、機能のほうは免疫系として研究され今日に到っている。そのためこれに関連した研究業績は数えきれないほど多い。これら業績のなかでとくに注目されるのは、相対するいろんな事項を捉えるその検索と考察である。

炎症における局所性と全身性、感染における原病巣と二次疾患、常在菌と外来菌とのかかわり合いなどがこれに該当し、免疫では末梢性と中枢性の問題、T, B cell さらにはその subpopulation の分布や役割などが該当する。

前者は現在における扁桃臨床の骨子を形成し、後者は新しい扁桃学としての理論を組み立てつつある。

しかし臨床においては扁桃肥大やアンギーナなどが幼児よりなじみの深い疾患として知られ、多くの診療科がこれにタッチしている。そのためその処置や対策についていろんな意見が出される。とくに扁桃の手術ではその適否をめぐるいまだに議論が尽きない。

本特集号は基礎と関連領域の先生方にも執筆をお願いし、扁桃に対する今日の診療指針をまとめていただいた。扁桃診療においてより新しい指針として役立ってくれば幸いである。

(編集委員)